



Vol.7

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ケメイキ(針仕事)



秋。なんとなく針仕事をしたくなる夜(ってあるよね(しないけど…笑))。

かつてのアイヌ社会では、立派な女性の条件は縫い物や刺繍が上手だということでした。女の子は小さい頃から、砂や囲炉裏の灰にあの独特の美しい文様を描いたり、布きれで針使いの練習をしたそうです。物語の中にも、美しく立派に成長した娘を讃える時に、「その刺繍から二つの神雲、三つの神雲が湧き上がる」との表現が見られます。

二風合での初めての冬、萱野先生の奥様にご指導いただき、アイヌの民族衣装を一枚縫ったの。私の宝物。数年前、アイヌの女性たちが研究室を訪ねて来られ、アイヌ文化談義で話が弾んだ時、年配のおばあさんが一人だけつ

まらなそうな表情をされてたの。ところがふと、その視線がガラスケースの中にあつた私の着物に止まり、

「あんだ、あの着物見せて」

私は「昔、私が縫ったもので恥ずかしいですけど」と言いながら手渡したの。そしたら、おばあさんは私の顔をまじまじ見つめ、

「あんだ、着物縫える人だったのかい」と言つてニコリされた。おばあさんにとって、アイヌ文化についての私のほんのわずかの知識なん

て取るに足らないこと。「着物が縫える女」

——この一点で認めてもらえたんだよね。

アイヌ民族の価値観を目の当たりにした、嬉しい思い出です。で、美幸さん、針仕事は？



小学生の時に縫った雑巾

くらいかな。

あつ、母の還暦祝い

に「赤いちゃんちゃんこ」を縫ったことがありました。

縫い物などのアイヌ

女性の嗜みを持ち合

せていない私ですが、

仕事柄、アイヌ衣服の

解説をすることが多

いから着物の形状や



襟付けなどの知識はあつたし、和服の前身頃に付く衽(たもと)がないので、アイヌ衣服の袖無し、短バージョンを作れば「ちゃんちゃんこ」になると思ったわけ。「ひどい縫い目だ」と言っていた母も親戚に見せるなどしていたからうれしかったのかも!?何ととっても、一針一針に私の思いが詰まった力作ですからね。

私の持つ民族衣装は母が縫ってくれたもの。白老ではルウンベと呼ばれる晴れ着で、テープ状の色布をいろいろな形に折り曲げ、刺繍したもの。その他にも大幅の布を切り抜くもの、布を置かず刺繍だけのものなどいろんなパターンの文様があり、作り手それぞれがオリジナルの文様の作者となるんだよね。

「アイヌ文様はどんな意味がありますか?」「どれが魔除けの文様ですか?」とよく聞かれますが「わかりません。」と言うと皆さん戸惑った顔をするけど、本当にわからないものが多いんだよね。文様、一つ一つに共通する意味はないので、同じ文様でも何を表現し、どんな意味があるのかは作り手にしかわからない。でも、その一針一針に込められる思いは、さまざままでかけがえないものであることは間違いありませんよね!

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌの子供達へのアイヌ語教育に携わる。

■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。(財)アイヌ民族博物館 専務理事。先住民族アイヌの一員として、アイヌ文化伝承と普及啓発活動に努める。